

小学生の英語学習向上に影響する要因 (意識調査・民間英語試験・授業分析の結果より)

新井 謙 司¹⁾

The Factors that Influence on the English Learning of Elementary School Students

Kenji ARAI

2020年の次期学習指導要領の全面实施を見据えた2年間の施行期間も残り半年となった今、児童がこれまでに、どのような英語の学習を進め、どのように英語学習について捉えているのか、そして、指導者はどのような授業づくりに取り組んできているのか、について多様な視点から分析することにより、2020年度からの教科となった英語の授業をよりよく充実させていくためのポイントをまとめる必要があると考えている。それにより、日々の授業改善の内容が明らかになり、目指すべき到達目標を明確にすることもできると考える。

そこで、2017年度から継続している、小学4年生・5年生・6年生の現在の英語学習に対する自己評価をまとめ、英検 Jr. 学校版 Bronze 級 / Silver 級の結果を比較・分析することにより、授業改善のポイントをまとめていきたい。なお、この調査は2019年度末までの3年間の継続調査であり、本稿においては、その2年目の途中経過報告とする。

キーワード：小学校英語、“できる度 Check”、英検 Jr. 学校版、授業改善

1. 2018年度 第1回・第2回意識調査 「できる度Check」の結果・分析について

本意識調査“できる度 Check”は、久埜・相田・入江(2011~2013)の研究において使用された、合計34の質問により構成されている小学生対象の意識調査^{*1}である。その質問項目の構成内容は、執行間近の学習指導要領で大きく変えた4領域に組み込まれた5つの習得目標(聞く・読む・話す(やり取り)・話す(発表)・書く)に関わる項目がバランス良く配置されていると考えている。そのため、現段階での子どもの英語学習、英語の運用、そして、英語に対する主体的な学びに向かう意識を探ることができると考えられる。また、子どもが初見の英文に対してどのように対応しようとするかを見ることができ、指導者の普段の授業における指導方法や指導内容を子どもの自己評価の結果から垣間見ることがで

きると考えている。このような理由により、中部学院大学「授業づくり連携協力校」を中心とした小学校において、2017年より継続的に本調査を採用してきている。

※1：質問項目の英文などは、当研究のために補正したものを使っている。

1.1 全体の意識調査の変容2017年度 vs 2018年度

ここでは、2017年度と2018年度に実施した意識調査(岐阜県高山市周辺の小学校4・5・6年生)の全体結果の推移をまとめている。この結果は、2017年度の第1回目の意識調査を基準にし、2017年・2018年の第2回目の意識調査を実施した学校(2017年：11校・1182人 2018年：14校・1185人)との比較を示しているが、すべて同じ学校・児童の回答結果の比較ではない。意識調査「できる度 Check」は、7月・2月の年2回実施している。

1) 教育学部子ども教育学科

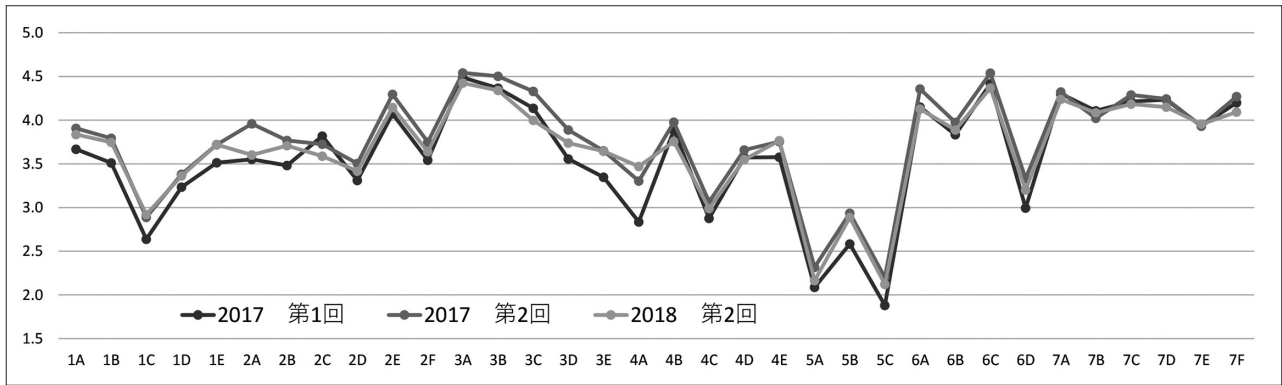


図1 “できる度Check” 2017年度 第1回 vs 2017年度 第2回 vs 2018年度 第2回

2017年度の1回目は、2017年度6月に実施している。本研究の取り組みが開始されて2ヶ月後ということもあり、授業改善のための学校訪問や研修会もまだ始まっていない時の児童の回答である。そのデータを基準にし、2017年度2回目の結果を見ると、ほとんどの項目において有意差をもって意識の向上が見られた。その2017年度2回目の結果と2018年度2回目の結果を比較すると、大きな有意差はほとんどの項目で見られなかった。

2017年度は、2020年度の小学校英語の教科化に向けて先行実施初年度であったことや、年間6回の小学校英語研修、授業改善のための計画訪問等が教員の意識を押し上げ、指導内容等に良い影響を与えたのではないかと考えている。しかし、2018年度になり、文部科学省の新教材 Let's Try! We Can! が導入され、それまでの研修や授業改善訪問等で学んだ授業改善や教材活用の視点が、新教材や指導内容に思うように絡むことができず、現場の教員の意識が、

新教材 We Can! の「指導編」に示されたとおりの指導内容を選択し、授業を展開することに集中していったことは否めない。それが、2018年度第2回目の結果の伸び悩みにつながっている要因の1つではないかと推測している。

1.2 連携協力校内の意識調査の比較 2018年度 学年内比較

2018年度は、新教材 We Can! が小学校現場で一気に活用される中で、中部学院大学の「授業づくり連携協力校」においては、新教材 We Can! では不十分な部分や補えない部分を他の副教材（例『えいごリアン2000～2001』、WORD BOOK や English in Action Online 等）を活用したり、指導方法の改善のための授業参観・模擬授業等を継続的に実施したりしながら、さらなる授業改善を目標としてきた。そこで、2018年度の連携協力校内（6校）の児童の意識変化について見ていくことにする。

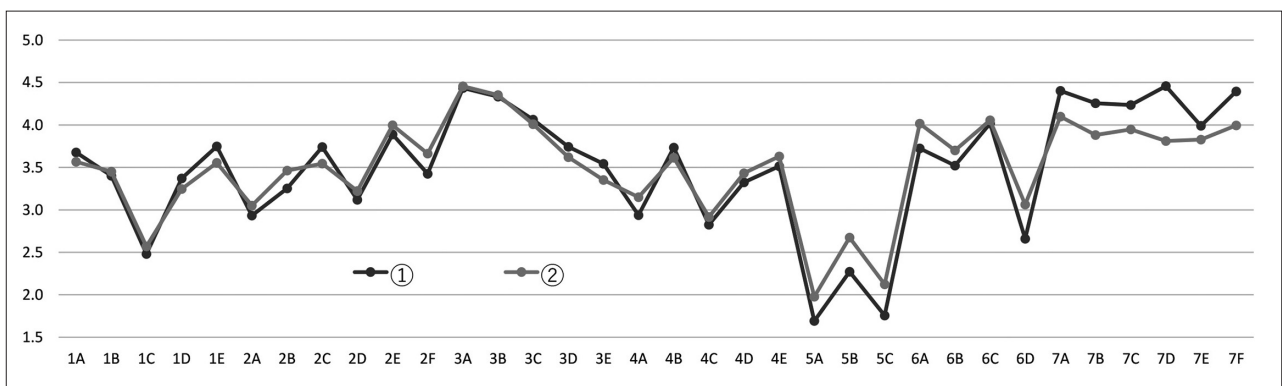


図2 連携協力校内 “できる度Check” 第1回 vs 第2回 4年生

この意識調査“できる度 Check”は、1回目を2018年7月、2回目を2019年2月に実施した。連携

協力校の4年生（183人）の結果（図2）は、5A・5B・5Cの文字を読むことに関わる項目においては、

若干伸びているが、ほとんどの項目において、7月と2月の約半年の間に大きな差はみられなかった。

しかし、項目7の「英語を使って他者と関わってみたい」意欲が低下していることがわかる。

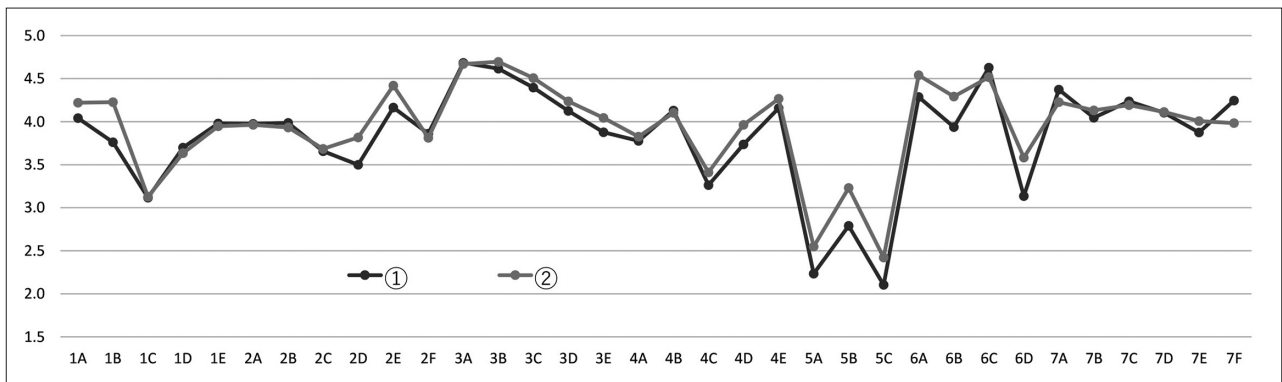


図3 連携協力校内 “できる度Check” 第1回 vs 第2回 5年生

同じく連携協力校の5年生(221人)の結果は、4年生同様に、5A・5B・5Cの文字を読むところ、そして、6A・6Bのアルファベットを書くことに関

わる項目において伸びが見られる。さらに、繰り返し扱う曜日や日付、身の回りにあるものの言い方については、安定して高い自信度を示している。

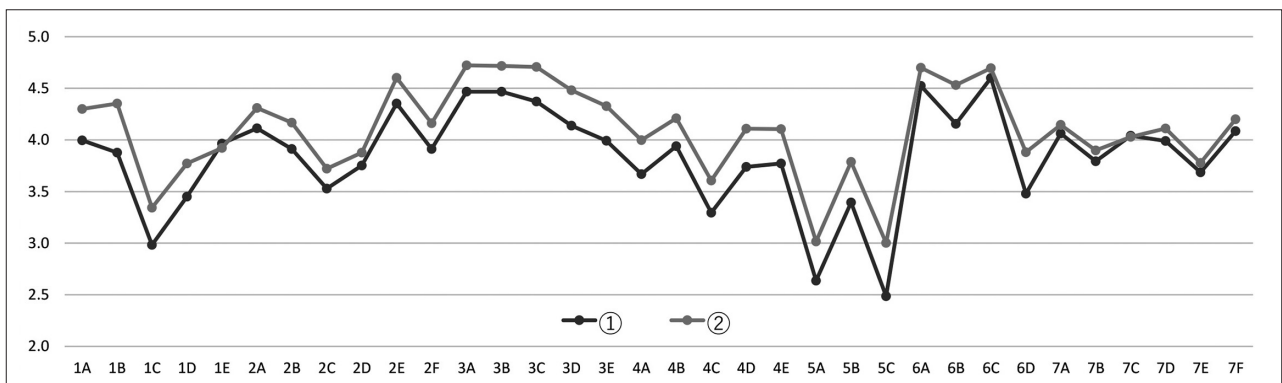


図4 連携協力校内 “できる度Check” 第1回 vs 第2回 6年生

連携協力校の6年生(264人)の結果は、ほとんどの項目において、高い水準で伸びている。特に3A~4Eの場面に合わせて定型表現を臨機応変に使うことや、5A~5Cの文字を読むこと、6A~6Dの文字を書くことについて、安定して高い自信度を示している。

びを見せていると言える。しかし、連携協力校間の比較をしてみると、連携協力校間の差が顕著であることがわかった。そこで、この1.3においては、「授業改善のために継続的に数回訪問した学校」と「校内職員研修のみを2回実施した学校」との比較を試みることにする。

1.3 連携協力校内の「授業改善のために訪問した学校」と「校内研修のみを実施した学校」との比較

図1~図4に示されているように、2017年度から2018年度までの2年間の連携協力校の児童の「できると思っている」自信度は、項目によって若干の伸

※「授業改善のために継続的に数回訪問した学校」：授業参観、授業支援、指導者への事後指導、模擬授業を実施した学校

※「校内職員研修のみを2回実施した学校」：年間2回教職員を対象としたワーク・ショップ形式の研修会を実施した学校

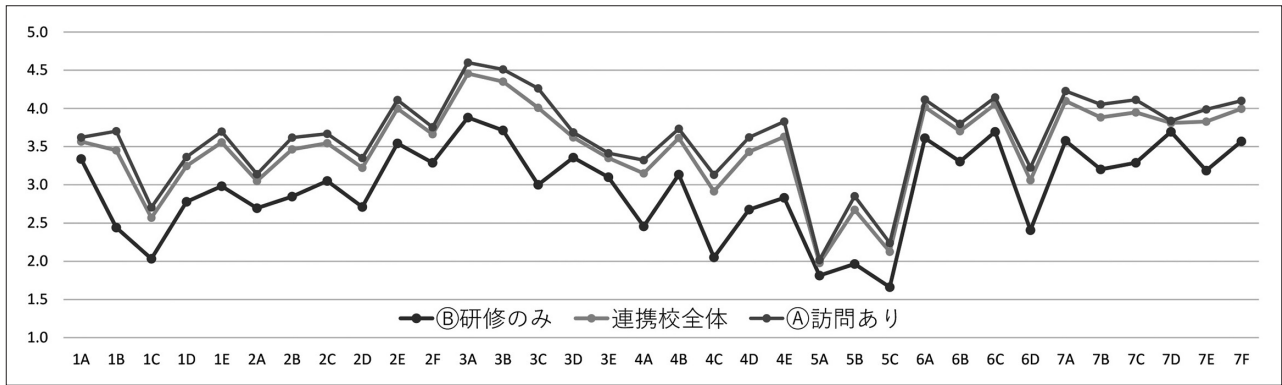


図5 “できる度Check” 第2回「授業改善のために継続的に数回訪問した学校①」 vs 「校内職員研修のみを実施した学校②」 4年生

図5より、校内職員研修のみの学校②の4年生(63人)は、授業改善のために継続的に数回訪問した学校①の4年生(120人)よりも、児童の自信度

がどの項目においても1番低く、学級の約50%の児童が「自信がない」と感じている項目が8項目あることがわかる。

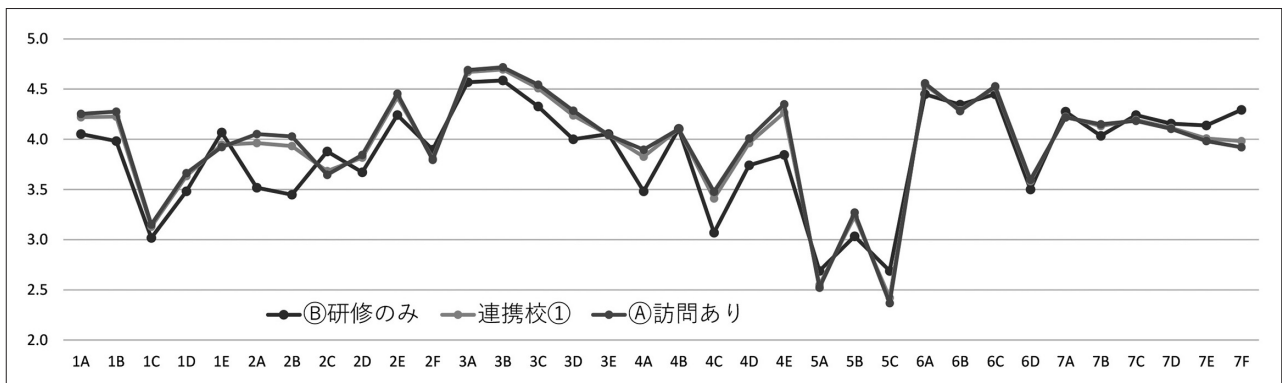


図6 “できる度Check” 第2回「授業改善のために継続的に数回訪問した学校①」 vs 「校内職員研修のみを実施した学校②」 5年生

図6より、研修のみの学校②の5年生(59人)は、授業改善のために数回訪問した学校①の5年生(162人)と比較すると、5項目において若干低い

が、多くの項目において、あまり差が見られないことがわかる。しかし、1E・5C・7F以外のすべての項目において低い結果となった。

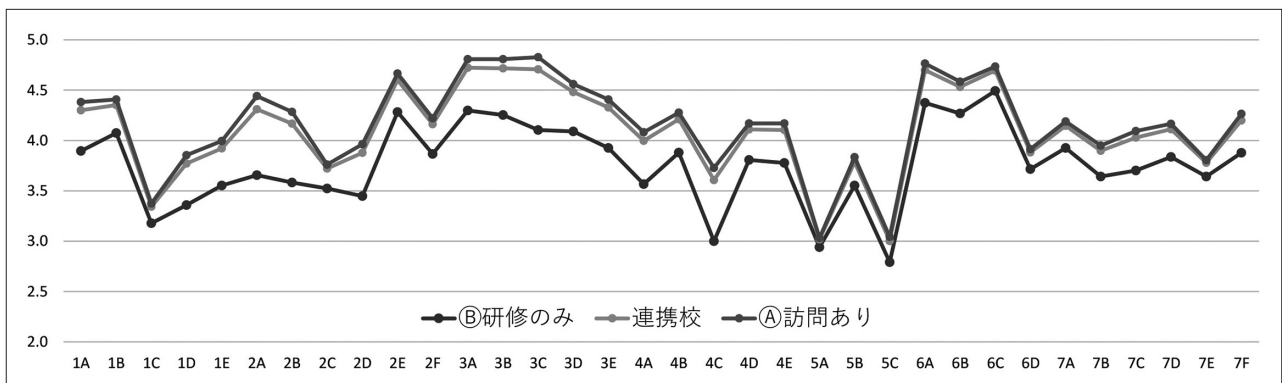


図7 “できる度Check” 第2回「授業改善のために継続的に数回訪問した学校①」 vs 「校内職員研修のみを実施した学校②」 6年生

図7より、研修のみの学校⑧の6年生(68人)は、授業改善のために継続的に数回訪問した学校①の6年生(206人)よりも、児童の自信度がほとんどの項目において1番低い値を示している。

図5・6・7から考えられることは、学年の母集団の学習能力や学習意欲の差も関係していると推測されるが、研修のみの学校⑧の4年生と6年生と授業訪問あり①校の児童との間には、自信度において大きな差がみられる。授業改善の訪問を受けてきた学校①の方が、高学年になるにつれて、全体的により安定した高い水準の自信度を示すようになっていく。

この結果になった主な要因として考えられることは、校内職員研修のみの学校⑧においては、日々の授業を改善する取り組みが不十分なまま新教材 We Can! の指導方法に沿ってのみ授業が展開されていること、2回の校内研修は行ったが、研修内容を授業改善に転用するだけの十分な時間がなく、We Can!等の学習内容を授業内で消化することで精一杯であった可能性がある。さらに、学んだ内容を新教材 We Can!等とリンクさせ、継続的な訪問と授業指導で紹介する活動内容や指導方法を取り入れたり、改善を継続したりする余裕がもてなかったのではないだろうか。つまり、校内職員研修のみの実施では、指導方法や指導内容の新たな視点を得ることはできても、日々の授業に十分に還元されていくまでにかなりの時間と労力を要するのではないかと考えられる。よって、授業改善のために学校訪問をし、授業参観や模擬授業、授業中の支援等を数回、または、定期的に行い、授業者と必ず直接の意見交換等を行うことにより、指導者の意識変化が起こり、そ

れが授業内容や指導方法に良い影響を与えるのではないかと考えられる。その結果、子どもたちの英語を学ぶ意欲・自信を高めていくことにつながっていると考えられる。

すべての学校においては、同じ新教材 Let's Try! 1,2や We Can! 1,2を使用している。①学校では、より効果的な指導方法の模索し、他の副教材((株)ぼーぐなん教材:WORD BOOK、ABCの本、English in Action Online、カード類等)を積極的に取り入れ、活用することによる子どもと指導者との「豊かなやり取り」を取り入れた授業改善を行ってきた。さらに、子どもの理解を促すための教材開発を行ったり、職員研修(授業参観・模擬授業)も定期的に行ったりしてきたことも子どもたちの意識の高まりに寄与している要因ではないかと推測される。

1.5 連携協力校間の比較 2018年度 第2回 できる度Check

図8・9・10で見られる連携協力校間の数値を比較すると、各学年、各項目によってもかなりばらつきが見られる。しかしF小学校は、4年・5年・6年のどの学年においてもほとんどの項目において低位を維持している。その反面、D・E小学校は、1A～6Dまでの項目において高位を維持している。A・B・C小学校は、学年や項目によっては高い位置を示すが、低い項目も見られる。

これらの連携協力校は、それぞれ小学校英語の取り組み体制、指導者、訪問回数、訪問内容、校内研修の方法等において違いがある。表1は、2018年度の実績である。

児童の英語学習に対する意欲や自信度は、指導者の授業改善の意識の変容からも影響を受けていると

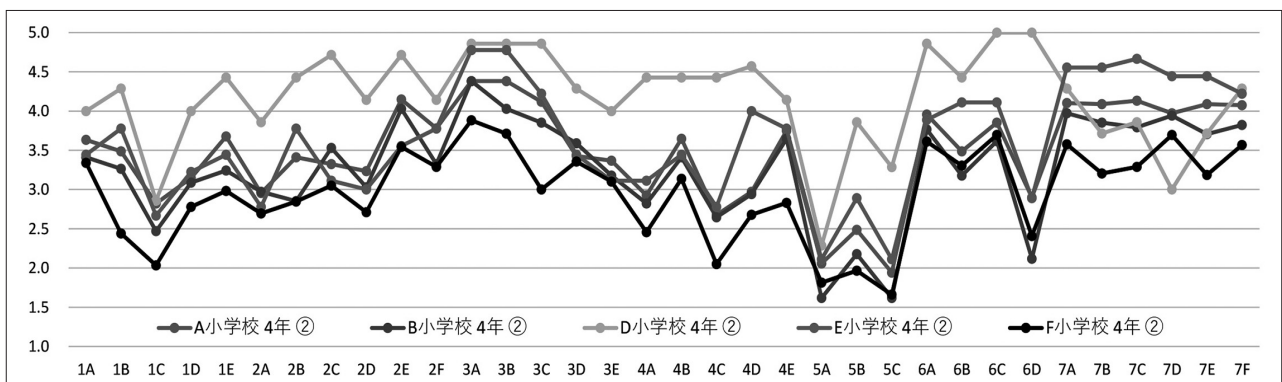


図8 “できる度 Check” 第2回 連携協力校間の児童の意識比較 4年生

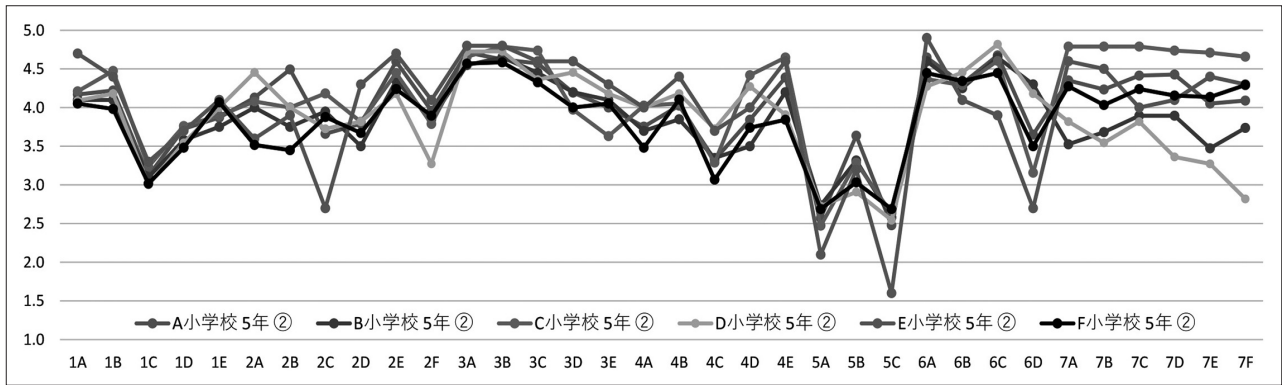


図9 “できる度 Check” 第2回 連携協力校間の児童の意識比較 5年生

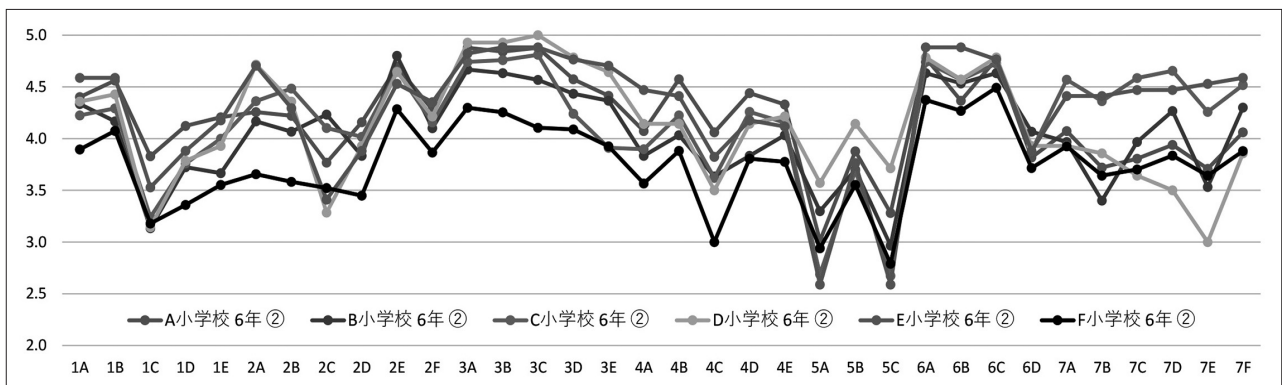


図10 “できる度Check” 第2回 連携協力校間の児童の意識比較 6年生

表1 2018年度 授業づくり連携協力校の授業改善の取り組みについて

	訪問	訪問方法	英語の取組体制	校内研修	指導者
A小学校	年間4回	授業参観・模擬授業 指導者へ事後指導(毎回)	校内研究として 全校体制で	A校1回	ALT JTE 担任
B小学校	年間3回	授業参観・模擬授業 指導者へ事後指導(毎回)	他教科と同じ扱い	B校0回	ALT 担任
C小学校	年間24回	授業参観・模擬授業 指導者への事後指導(不定期)	他教科と同じ扱い	2回	ALT JTE 担任
D小学校	年間6回	授業参観・模擬授業 指導者へ事後指導(毎回)	校内研究として 全校体制で	1回	ALT JTE 担任
E小学校	年間6回	授業参観・模擬授業 指導者へ事後指導(毎回)	校内研究として 英語科のみの取組	1回	ALT JTE 担任
F小学校	年間1回	模擬授業	他教科と同じ	2回	ALT 担任

仮定するならば、表1のF小学校と他校との間で大きな差がみられたことから分かるように、定期的な授業訪問、授業参観、模擬授業、校内研修の実施を総合的、かつ、継続的に行っていくことが、指導者の意識の変容を押し進めていくと考えられる。さらに、C小学校の訪問方法から、学校体制として英語

を校内研究の柱として全職員で取り組んだり、本研究者が、授業参観や模擬授業後に確実に指導者へアプローチし、事後指導を行うことが確保されていたり、指導者と意見交流等をもつ機会があることにより、子どもの意識の変容にプラスの効果を与えていることを示しているとも考えられる。つまり、訪問

回数が少なくても指導者へ直接コンタクトをとって事後指導をすることにより、英語の授業改善の意識の変容が生まれやすくなると考えられる。そういった総合的な取り組みを実施できていないF小学校では、指導者の意識変容を促すことができず、それが児童の英語学習への意識に影響を与えているのかもしれない。このことから、本研究の「授業づくり連携協力校」の取り組みは英語の授業改善に有効に働いていると考えてよい。

2. 2018年度 英検 Jr. 学校版 Bronze 級 /Silver 級の結果と意識調査「できる度 Check」の結果との比較・分析

2018年度の英検 Jr. 学校版 Bronze の受験者数は1128名（2017年度885名）、Silver の受験者数は601

名（2017年度実施なし）となり、合計1729名となり前年度の倍以上の参加となった。これは、2017年度から進めている小学校英語研修や授業訪問等による学校教職員の意識変化の表れの1つであると考えている。

ここでは、英検 Jr. 学校版の結果と“できる度 Check”の結果との比較を見ていくことにする。

2.1 中部学院大学 授業づくり連携協力校間の結果比較（2018年度）

図11より、D小学校がどの項目においても他の小学校よりも高い結果を示している。E小学校は、語句の項目でD小学校と同じ結果であったが、会話の項目で低い結果を示した。A小学校とF小学校は、ほぼ同じような結果であったが、若干F小学校の会話の項目でA小学校よりもよい結果を示した。

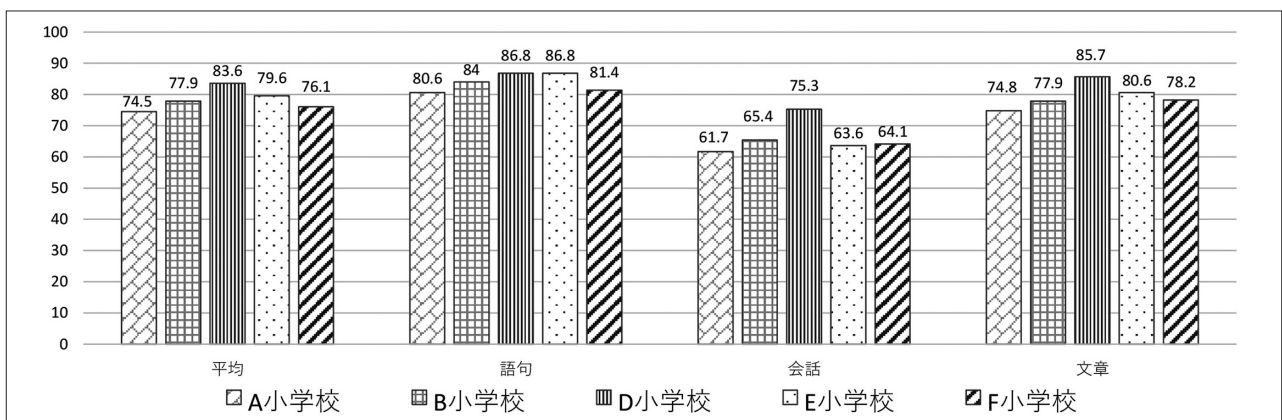


図11 2018年度 4年生 連携協力校内比較 英検 Jr. 学校版 Bronze 級

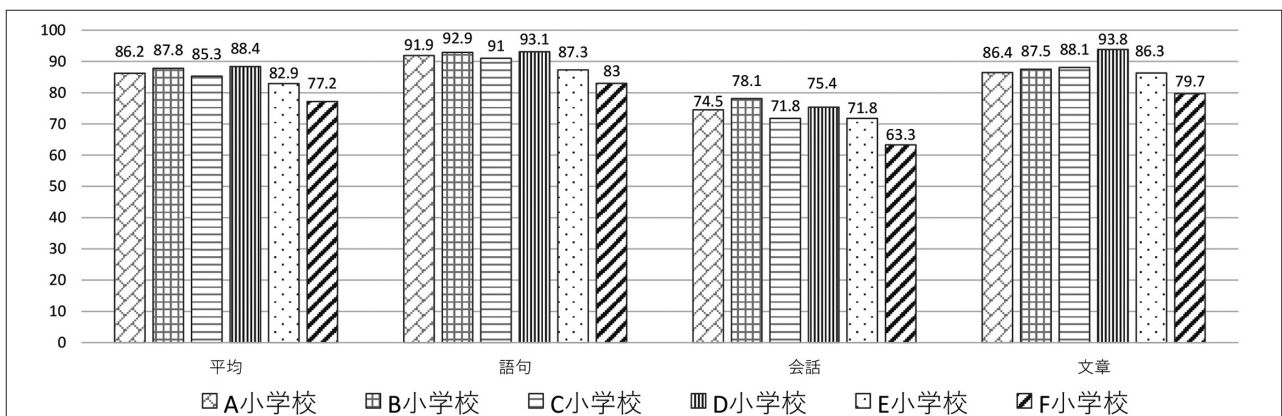


図12 2018年度 5年生 連携協力校内比較 英検 Jr. 学校版 Bronze 級

図12より、4年生でも成績が良かったD小学校は、会話の項目以外すべての項目で高い値を示した。B小学校の会話項目の結果が他よりも高い値を示して

いる。F小学校は、すべての項目において他と比べて1番低い値を示している。

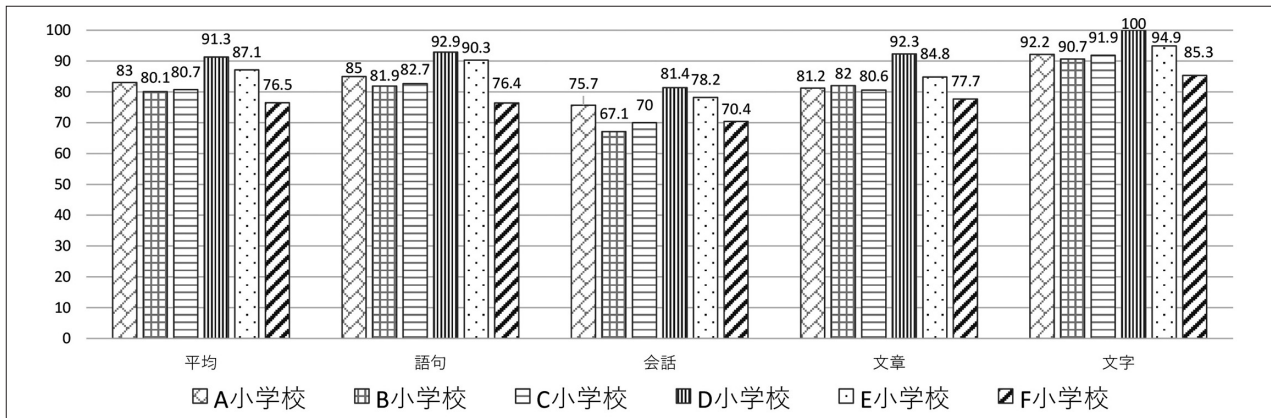


図13 2018年度 6年生 連携協力校内比較 英検 Jr. 学校版 Silver 級

図13より、D小学校がすべての項目において高い値を示している。E小学校はD小学校の次に高い値を示している。F小学校は、どの項目においても1番低い値を示している。

これらの結果から考えられることは、英語を校内研究の柱の1つにし、全校体制で英語の授業改善に取り組んでいる学校（D・E校）が、すべての学年の結果において高い値を示す傾向が見られるということを示している。数値の低いC小学校は、授業支援の訪問回数が他の小学校より多いのだが、指導者へのコンタクトが少ない環境である場合は、指導者の授業改善の意識が高まらず、結果、子どもたちの学びの質の確保が困難である場合があると推測される。

また、全体の平均結果に影響を与えているのが「会話」の項目である。「会話」項目では、2人が短めの会話をし、その会話の内容に合う絵を選ぶ問題が出題される。D小学校は、どの学年においても、会話の項目において他と比べて高い結果を示してい

ることから、D小学校の基本的な授業スタイルが、指導者と子どもの場面にあった言葉の「やり取り」が多く取り入れられ、会話の流れの中で意味理解を深めていく機会が多いことが数値に表れている可能性があるかと推測できる。

2.2 連携協力校以外の英検 Jr. 学校版 Silver（6年生）の結果比較（2018年度）

図14より、連携協力校以外の学校の結果は、どの項目においても大きな差があまり見られないが、特に語句と文字の項目はほとんど差がない。会話と文章の項目において、多少の差が見られる。連携協力校D小学校の結果と比べるとすべての項目において低い値を示す結果となった。

この結果から考えられることは、やはり連携協力校の取り組みにおいて、継続的に授業改善に取り組むことにより、子どもの意識だけでなく、客観的な英語力の伸張にも良い影響があるということが言える。

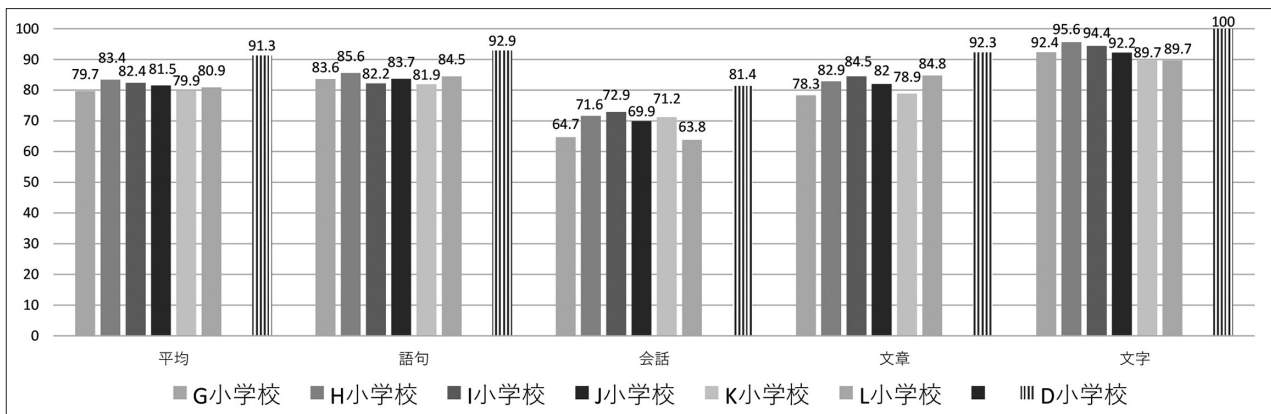


図14 2018年度 6年生 連携協力校以外の学校間結果比較 英検 Jr. 学校版 Silver 級

3. D小学校(6年生: Silver 級受験) 授業分析・英検 Jr. 学校版の結果・意識調査の結果比較

2.1 のまとめにおいて、「D小学校は、どの学年においても、会話の項目において他と比べて高い結果を示していることから、指導者と子どもの場面にあった意味のある言葉の「やり取り」が多く取り入れられ、会話の流れの中で意味理解を深めていく機会が多い可能性があるのではないか」という仮説を立て、以下の点について授業分析を試みた。

そこで、英検 Jr. 学校版 Silver 級の実施直前に行われた平常の授業、即ちD小学校6年生の授業(46分:2019年1月28日実施)について、新井(2018)の報告書にまとめた下記の(ア)～(ケ)の視点に、(エ)指導者が英語で子どもとやり取りしている時間(Q & A)に「子どもに問いかけながらターゲットの表現を聞かせる活動を含む」、(キ)「文字を見せている・知っている単語を文字化している・文字から類推させて発音をしている等を含む」、そして、(ケ)「英語での説明(リスニング問題、評価、活動の準備、課題提示等)」を追加して時間配分を分析した。対

象の授業については、普段のままの授業であり、本研究に関わる内容や意図は事前に伝えておらず、何も統制していない授業である。

- (ア) 定型パターン表現(あいさつ等)の時間
- (イ) 歌やチャンツの時間(新教材 We Can 等のチャンツ含む)
- (ウ) 指導者同士が英語でモデリングをしている時間
- (エ) 指導者が英語で子どもとやり取りしている時間(Q & A・子どもに問いかけながらターゲットの表現等を聞かせる活動を含む)
- (オ) パターン練習、リピートをさせている時間(ゲーム的な活動を含む)
- (カ) ペア、グループでのやり取りの時間
- (キ) 文字指導の時間(文字を見せている・知っている単語を文字化している・文字から類推させて発音をしている等を含む)
- (ク) 日本語での説明(評価、活動の準備、課題提示等)
- (ケ) 英語での説明(リスニング問題、評価、活動の準備、課題提示等)

表2 連携協力校D校(6年生) 授業内容配分表

学校	英検 Jr. 学校版 Silver	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)	(キ)	(ク)	(ケ)	指導者	指導内容
D	91.3	2'40	0'00	0'00	20'22	6'43	8'07	1'20	0'00	6'30	ALT JTE	Do you want to watch~? What do you want to watch? Sports
		5.8%	0%	0%	44.3%	14.6%	17.6%	2.9%	0%	14%		

表2より、(エ)指導者が英語で子どもとやり取りしている時間(Q & A・子どもに問いかけながらターゲットの表現を聞かせる活動を含む)が他の項目よりも46分間の中でしめる割合がかなり多いことがわかる。44.3%には、授業のターゲットになる語彙・表現だけでなく、既習の表現等も活用しながら、自由度の高い子どもとのやり取りも含まれている。このような自由度の高いやり取りを英語のみで行うことができる理由の1つに、指導者がALTとJTEであることが挙げられるが、2017年度の報告にもあるように、指導者の種類と英検 Jr. 学校版の結果には相関が見られないことが分かっている。

ここで、2017年度の授業分析の結果と2018年度D小学校6年生と比べてみることにする。

表3については、授業実施時期や指導者、英検 Jr. 学校版の受験級がH学級は Bronze 級(2017年度)、D学級は Silver 級(2018年度)と異なっているため、単純に比較することは困難ではあるが、H学級とD学級の授業分析の項目(エ)が酷似していることがわかる。2017年度の時点では、ある1つの学級のみでの授業分析であったため、可能性の1つとして「やり取り」が重要な要因となると考えた。しかし、2018年度もほぼ同じ視点で授業分析をしてみると、英検 Jr. 学校版の結果が他と比べて顕著に高い学級

表3 2017年度 英検 Jr. 学校版 Bronze 級の結果と授業内容配分表 (H,Dは学級)

%	英検	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)	(キ)	(ク)	(ケ)	指導者
2017年度H	91.7	3.4%	0%	3.3%	44.0%	0%	22.2%	13.1%	13.9%	--	ALT JTE
2018年度D	91.3	5.8%	0%	0%	44.3%	14.6%	17.6%	2.9%	0%	14%	ALT JTE

表4 H学級の2017年度と2018年度の授業内容配分表

%	英検	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)	(オ)	(カ)	(キ)	(ク)	(ケ)	指導者
2017年度H	91.7	3.4%	0%	3.3%	44.0%	0%	22.2%	13.1%	13.9%	--	ALT JTE
2018年度H	87.1	1.9%	10.2%	2.0%	22.3%	21.6%	2.6%	7.8%	14.1%	18%	ALT JTE

の授業では、項目(エ)「指導者と子どものやり取り」の時間数が重要な要因である可能性がさらに高まった。

表4では、同じ児童の2017年度と2018年度の英検 Jr. 学校版と授業内容配分を比べている。

指導者の JTE が2017年度と2018年度では異なる (ALT は同じ)。2017年度と2018年度を比べると、項目(エ)が半減し、項目(オ)が増え、ペア等での活動の項目(カ)が減っている。このことから、指導者の授業スタイル(指導者が言わせたい表現等を教えて言わせようとする傾向のある指導方法)が子どもたちの学びをかなり統制したものであり、子どもが言いたいことを言う自由度の高い言語活動や指導者と子どもとの「意味のあるやり取り」が少なくなっていると考えられる。

さらに、2018年度のH学級の項目(ケ)においては、英語での説明や新教材 We Can! のリスニング問題等に当てる時間のどちらの年度も確保はされているが、2018年度のD学級の確保の仕方とは異なっていた。H学級では、指導者が日本語を使用しないで英語で説明したり、数回英文を聞かせたりしているものの、児童が理解したかどうか、何を聞いたかどうかのみを単に確認することで終始する指導方法を採用していた。一方D学級では、H学級同様に指導者が日本語を使用しないで英語を使用して説明したり、数回英文を聞かせたりしているが、児童が理解しやすいように、聞く視点を子どもと「やり取り」をしながら絞り込み、焦点化して英語を聞かせ、子

どもが自信をもって「言いたい」「答えたい」という気持ちを高められるように進めていく指導方法を採用していた。

英検 Jr. 学校版の結果が他の連携協力校よりも高かった2017年度のH学級と2018年度のD学級の「やり取り」の共通点として、指導目標の表現を使用しながらも、子どもとやり取りする課程で、1つの話題から既習の言語材料を活用し、子どもの反応に合わせて話題を膨らませながら、「真実味のあるやり取り」を展開していることが多いことも特徴の1つと考えている。このような英語を意味のある言葉として、子どもと「英語を使い合う」ことを大切にする指導観をもった指導者が授業を展開することも英検 Jr. 学校版の結果に何らかの良い影響を与えているのではないかと考えている。

【本調査研究の中間結果：“できる度 Check”の結果と英検 Jr. 学校版の結果より】

これまで、“できる度 Check”の結果の連携校間の比較、英検 Jr. 学校版の連携校間と連携校以外の学校の比較から考えられることをまとめてきた。

連携校間における小学6年生の意識調査「第2回 “できる度 Check” (2019年2月実施)」と英検 Jr. 学校版 Silver 級(2019年2月実施)の結果から、子どもの英語学習に対する意識の高まり度と実際の英語力(主に Listening 力)との関係を見ることにする。Silver の結果のみを見る理由は、2017年度は Bronze 級のみを実施したため、天井効果が見られる結果も含まれていたため、2018年度は、Silver 級

(6年生が受験)の結果から考察することにした。

図10より、A小学校、D小学校、E小学校の6年生は、多くの項目において高い意識度を示している。そこで、図13を見てみると、英検 Jr. 学校版 Silver 級の結果においても、A小学校、D小学校、E小学校が、ほとんどの項目において高い結果を示している。

2017年度の両結果を2018年度同様に調べてみても、英語学習に対する意識の高まりが見られる小学校の英検 Jr. 学校版の結果は、比例して高くなる傾向が見られる。この結果より、久埜・相田・入江(2011~2013)の研究の通り、英語学習への自信度を高めていくことが、より児童の英語学習の定着を促し、英語力の伸張に深く寄与するのではないかと考えられる。

4. おわりに (2019年度の研究の方向)

すでに2019年度に向けて研修・授業訪問・勉強会、その他の予定を組み、取り組み始めており、授業づくり連携協力校については本年度より新規で2校増え、7校が参加。2019年4月から特に、新規の連携協力校を中心として活動を開始している。また、2019年度版の意識調査「第1回“できる度 Check”」は、すでに7月に実施済みである。2019年度は、3年継続の本研究の最終年である。2017年度・2018年度の結果をうけ、2019年度はより具体的な授業分析を行い、できる度の意識の高まりをつくる授業内容、指導方法等について分析する予定である。その分析により、児童の英語力の伸張を促す授業改善のポイントをまとめ教育的示唆としたいと考えている。

5. 引用文献

新井謙司(2018). 小学4・5・6年生の英語学習に関する自己評価とその影響要因, 中部学院大学・短期大学部, 教育実践研究第3巻第2号.
久埜百合・相田眞喜子・入江潤(2011~2013). 早期英語 Can-Do の研究 児童の学習意欲向上を図る自己評価の効果を探る調査, 日本英語検定協会助成研究.

6. 資料 (注釈※1)

“できる度 Check” 質問項目：久埜百合・相田眞喜子・入江潤(2011~2013)より

- 1A 名前や好きな色など、自分のことについて質問されたら何を聞かれたかわかる
- 1B 「本をひらきましょう」などと英語で指示されたらわかる
- 1C お話のあらすじを英語で聞いて何のお話かわかる
- 1D 先生と友だちが質問したり答えたりしているのを聞いて何を話しているかわかる
- 1E 英語の説明を聞いていくつかの絵の中から説明の内容と合うものを選ぶ
- 2A 1から100まで数えられる
- 2B 曜日や月の名前を言える
- 2C 歌を歌ったり詩を暗唱したりできる
- 2D 色、動物、食べ物、教室にあるものなど、身のまわりのものの言い方を英語で聞き取ったり、言ったりできる
- 2E アルファベットを順番通りに言える
- 2F アルファベットを英語の発音に気をつけて言える
- 3A 英語であいさつができる
- 3B 英語でお礼を言える
- 3C 英語で謝ることができる
- 3D 自分の好きなもの、好きではないものを英語で伝えられる
- 3E どの色が好きかなど好みについて質問できる
- 4A 欲しいものについて伝えられる
- 4B 先生やお友だちが自己紹介をしているのを聞いてわかる
- 4C 英語の言い方がわからないときにそれを英語で何というか質問できる
- 4D 自分の健康状態を伝えられる
- 4E 英語を聞き取れなかったとき「もう一度」とお願いできる
- 5A (示されている歌詞を見て) 知っている歌の歌詞が英語で書かれていたら何の歌かわかる
- 5B (8行の文章を見ると) 下の文章が何を説明しているのかわかる
- 5C (90語程度の文章を見ると) 誰のことについて書かれた文章かわかる
- 6A アルファベットの大文字を書ける
- 6B アルファベットの小文字を書ける
- 6C 自分の名前を書ける
- 6D 英語で「パンダ」と書ける
- 7A 英語のお話を聞いてもっと分かるようになりたい
- 7B 英語の歌をもっと歌えるようになりたい
- 7C 英語の本を自分でも読めるようになりたい
- 7D 世界のいろんな人たちと話せるようになりたい
- 7E 英語以外のことばも勉強してみたい
- 7F 自分の思いや考えを英語でも書けるようになりたい